

フリガナ	ミズサワコウイチ
氏名	水澤 幸一
学位	博士（文学）
学位記番号	新大博（文）第7号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
博士論文名	越後国奥山荘からみた中世考古学の研究－日本海流通と仏教の考古学－

論文審査委員	主査教授	矢田 俊文
	副査教授	小林 昌二
	副査教授	荻 美津夫
	副査	超域研究機構 教授 白石 典之

博士論文の要旨

本論文は、日本中世の越後地域を中心に、陶磁器・土器・墓地・仏教系石造物の考古学的研究を行ったものである。

序章は、歴史考古学の歴史学における位置付けを試みたもので、まず考古学と文献史学の位置付けを行い、文献がそれなりに存在する中世考古学こそは考古学が最も有効に機能する分野であること、また荘園考古学は範囲を特定できるという意味でそれまでの考古学にない研究が行える研究であることを論じている。

第一編は、日本海沿岸地域での土器・陶磁器・漆器等の流通状況の解明を目的としたもので、特に考古学の基礎資料となる大量に流通していた食膳具形態の出土遺物を主に扱っている。分析は、考古学の基本である遺物群の共伴関係を重視し、それに紀年銘木簡などによって所属時期がはっきりしている遺跡・遺構を組み合わせることで広域流通品の搬入時期を求めるという中世以降の考古学特有の方法、さらに、遺物の形態変化・分布状況・統計処理的方法によって行っている。

第一章は、貿易陶磁器の流通を追究したもので、中世前期と後期に大別して日本各地の貿易陶磁器の出土量を比較検討することにより日本海沿岸地域が中世を通じて非常に大量の陶磁器がもたらされた地域であることを明らかにしている。さらに日本に貿易陶磁器が大量に流入してくる11世紀後半以降、鎌倉時代までの状況を論じ、その分布状況から京都を経由しない博多からの日本海直通ルートがすでにその時点で成立していたと論じている。また、15世紀前葉～中葉にかけての青磁・白磁・土器等の出現時期を検討し、新製品が段階的にもたらされていることを明らかにした。また、遺跡の性格と場での使われ方を検討することにより、瀬戸・美濃天目茶碗よりも舶載天目茶碗が重視されていたことを明らかにしている。さらに、信楽壺

は14世紀末以降には流通していることを明らかにしている。最後に、16世紀中葉前後に急激に減少する貿易陶磁器、瀬戸・美濃等を通じて、遺跡が日本海地域で明らかにしにくい状況にあることを指摘し、その要因は生活様式が陶磁器から漆器に移行したことによるものであることを明らかにしている。

第二章は、中世後期における瓦器の器種分類を行いその性格を考察したもので、風炉等の器種は、支配層が欲したものであり、舶載天目茶碗・茶入・信楽壺・茶臼などの茶道具類と組み合わせられて販売された高級品の一角を占める製品であったことを明らかにしている

第三章は、陶磁器類との共伴関係を軸に土器の形態変化を明らかにしたもので、京都との関係が強いてづくね成形土器が戦国期の守護権力との関係を示すことを明らかにしている。また付論では、越後における平地の方形居館から山城への本拠地の移動などを明らかにしている。

第四章は、漆器の時期的変遷を明らかとしたものである。漆器は用材と塗りの関係が時代によって変化していくことも明らかにしている。

第二編は、越後を中心とした仏教系の遺物から考察を行ったものである。

第一章は、地域の霊場と墓地の在り方を検討したもので、霊場には各種石造物が群集する景観を呈するが、地域によってその種類に違いがあると述べる。また、韋駄天山中世墓地の様相を検討して領主層の墓制の在り方を明らかにし、さらに浦廻遺跡から埋葬しない葬送儀礼の在り方を明らかにした。

第二章は、密教法具各種、鉦鼓、錫杖の年代的位置付けを出土状況等から明らかにしようとしたもので、各仏具の流れを図示し基礎資料として示した。特に古式錫杖については、これまで奈良時代に遡るとされていた資料群は出土状況や型式学的検討により、平安中期以降に下るものであることを明らかにした。

第三章は、越後の仏教系石造物の時期的位置付けを検討したもので、阿賀北の紀年銘板碑から蓮台の時代相を抽出することにより無紀年銘板碑に年代的位置付けを与えた。また、小泉荘・奥山荘の板碑の分布及び時期的分析によりその地域性を明らかにした。さらに石仏について、蓮台相等から時期を決定し、板碑と並行して造られ始めるものの中心的時期はすこし後にくることを明らかにした。五輪塔が主たる石塔の位置を占める頸城地域では全国の紀年銘資料を基に法量の比較を通じて、頸城の五輪塔が14世紀初頭頃から造立され始め、15～16世紀にかけて爆発的に造られていたことを明らかにした。以上の成果をふまえ、阿賀北地域が板碑・石仏中心、魚沼地域が板碑中心であるのに対し、頸城地域は五輪塔中心であるという地域性を明らかにした。

結章は、以上の成果を基礎に、そこに文献史料を合わせて奥山荘の景観を復原し、さらに発掘調査の成果によって明らかとなった奥山荘中条の中心地政所条遺跡群の変遷を通じて、考古学を中心とした奥山荘研究の到達点を明らかにしている。

審査結果の要旨

本論文は、日本中世の越後地域を中心に、陶磁器・土器・墓地・仏教系石造物の考古学的研究を行ったものである。

本論文で評価できる主な点は、次の点である。

1つめは、越後地域で出土する白磁は京都を経由しないで、博多から直接にもたらされたことを指摘した点である。このような理解は、奥州平泉研究などに大きな研究の修正を迫るものとして評価できる。

2つめは、瓦器の出土のあり方の違いが階層の差を示していることを明らかにした点である。これは瓦器研究の進展を促すだけでなく、遺物から階層差を認識できる資料として活用できることを示したもので評価できる。

3つめは、石塔・陶磁器（骨壺）を伴わない墓地が存在することを明確にしたことである。この研究により、石塔・陶磁器からでは墓地を明確に推定できない地域における墓制研究を進展させることができるようになった。

4つめは、無記年銘石造物に年代的位置づけを与えたことである。このことにより、石造物を地域研究の資料として活用できる道を開いた。

本審査委員会はこれらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容を有していることを認定した。

また、本論文はきわめて中世考古学としての専門性の強いものであることから考えて、水澤幸一氏に博士（文学）を授与することが妥当であると一致して判断した。